

我が家のスーパーマーケット チャタジー・公子（インド）

歩いて1分足らずの十字路が、我が家の「スーパー」です。朝7時半ころから11時頃まで、野菜、魚、ニワトリの肉を売る人が地面に座って「店」を開きます。全部で5人ほどの売り手で、買い手は近所の住民です。卵や砂糖などちょっとした食糧雑貨も買える常設の小さな店も1~2軒あり、茶店もあります。ここでは買い物は主に男性の役割のため、朝はたいてい出勤前に買い物をするお父さんたちで結構賑わいます。もちろん、自転車やオート（三輪型相乗り小型車）に乗って行けばもっと大きな市場もありますが、私はたいていはここで食材を調達します。

惣菜などの加工品や調理品が発砲酢チロールのパックに入ってズラッと並ぶ日本のスーパーとももちろん違って、物はすべてそのまま、魚もニワトリもその場でさばいてもらいます。野菜は量り売りで、値段の変動が生活とじかに関係してきます。季節、洪水や干ばつの災害の有無、お祭りシーズン、政治問題に起因する交通ストによる運送面での影響などです。ちょうど今は雨季の遅れや干ばつの兆候から野菜の値段が高くなって、庶民の財布も大変です。もっとも自分の国でできる農産物や食糧品が輸入品より値段が「高い」という、日本の食糧事情のような摩訶不思議な現象に頭を悩ませる必要がない分、楽かもしれない。それに、過剰包装による余計なゴミを出さないという面でも気持ちがいいです。

しかし、野菜や果物の安全性はここでも楽観的ではられません。より新鮮に見せるために化学色素をつけたり、新聞でも野菜や農産物の農薬残留の問題を取り上げている記事を多く目にします。調査品目の75%以上に基準以上の残留農薬が検出され、しかも青菜系統の野菜で顕著だといいます。「あなたのスープには毒がある」などという記事を読むとぞっとします。年配の主婦からも、今の野菜は化学肥料や農薬で作られているので、昔みたいに香りがいいし、安全ではないから一回ゆでてから調理している、などと嘆く声も聞こえます。

インドから輸出されるマンゴーや紅茶は、日本や外国での農薬残留基準を満たすためにそれように栽培されていると聞きます。逆に見ればインド国内の庶民は、残留農薬のたっぷりあるマンゴーや紅茶を食していることにもなります。当団体のNGOも含め、インド国内で有機農業の普及や食の安全性を促す活動をしている団体もいくつかありますが、消費者の意識が向上し、消費者運動のような動きが出てくるまでにはまだ道のりがありそうです。今朝も我が家の「スーパー」に野菜を買いに行きます。例えば、赤紫に色をつけられたサツマイモを見るたびに、消費者としてこういうことを阻止するためには、具体的に何をどのようにしたら良いのだろうかと考えてしまいます。



◀ 野菜売り